

石川啄木のワグネル研究

日 景 敏 夫

はじめに

啄木のワグネル研究は、盛岡中学校を退学する直前に、嘲風に影響を受け、敗残者となって故山洪民で必死に再起を諮る時期を経由して、洪民を追われ北海道に渡るまで、ほぼ5年間続いている。この5年間とは、まさに啄木の自我形成の期間である。洪民日記（明治三十九年三月廿日）において「かくてワグネルの示した人生の理想は、完全なる基礎に立つて、初めて真に我が最高最後の目的となったのである。」と述べているように、この自我の形成はワグネルに多大な影響を受けている。

本論の目的は、書簡・日記・岩手日報に掲載した「ワグネルの思想」を通して、啄木のワグネル研究を論考することである。特に、(1) 書簡では、Heaven sent Genius, time alone can proveなどの英語が出てくるが、この出処は何であるのか、(2) 「甲辰詩程」（明治37年7月28日）においては、「左に記す所は乃ちリッジー氏がワグネル劇解説中の『タンホイゼル』の一章を抄訳するものなり」の「左」についての解釈 (3) 抄訳とその原文を対照し、啄木の英語力を検証する (4) 「ワグネルの思想」を書いた目的 (5) 「ワグネルの思想」を中断した理由 (6) 「ワグネルの思想」の見出しとリッジーの“Wagner”の見出しを比較対照して示す。上記の事項は、殆ど先行研究が存在するが、その検証も兼ねている。

1. 啄木の書簡に見るワグネル

1-1 啄木のワグネル研究のはじめ

明治35年10月27日、石川啄木は盛岡中学を自らの意思で退学し、文学で自分の身をたてるべく、「人生の高潮に自己の理想郷を建設

せんとする者也」⁽¹⁾と意気込んで上京した。しかし、東京生活はわずか4カ月にして挫折することになる。その時の心情を、姉崎嘲風宛ての書簡の中で次のように吐露している：「その年の秋。学途半ばに袂を払いて、烈しき戦ひの世に乗り出すべく、杜陵の校舎を退き、慄然として東都塵に放浪の生活をはじめ申候。胸に華やかなる幻楼を描ける身に候ひかど、その夢も次第に影うすれて、冷たき大都の冬枯れたる街頭に、取り残されたるはただ失敗と病とをかちえたる残骸に候ひき。」⁽²⁾

この書簡は明治37年1月13日のことで、岩手日報に「ワグネルの思想」を連載した6カ月後である。過去の自己の失敗を素直にみとめ、現在は再起の途上にあることが読み取れる。この再起の根底にあるものは、秋韻笛語12月1日の日記に、17歳の少年が書いたと思えない名文でつづった故郷洪民村と節子に対する深い思いなのであろう。

書簡にワグナーが初めて登場するのは、明治35年10月17日、細越毅夫宛である。：

「我は思ふ若し或る人の人格を知らんと欲せばその人の「愛」に対する解釈をきくを以て足らん高尚なる感情は高尚なる人格を形造る高尚なる愛の一念は人生の最高貴なる価値也。詩人の立脚地も亦ここにあり。最高の意思は最高の感情を伴ふこれわが持論也嘲風博士がニイチェに満足せずしてワグネルの愛の世界観を喜ぶも亦この理に外ならず。高き、強き、大なる、この三つの語に対する時我はひざまづきて讃ず」⁽³⁾

この書簡は盛岡中学校の退学が許可になる10日前のことである。これを見ても明らかのように、啄木は中学時代から姉崎嘲風を読み啓発されている。これに関連した事情が、明

治37年1月13日の姉崎正治（嘲風：筆者注）宛書簡に述べられている。

「一昨年の夏と覚え候。先生の故樗牛氏に与えられたる前後二回の開書、太陽誌上にて拝見致し候時、稚き迷ひに胸悶へたる小生には、云ひ知らず尊き光の影と仰がれ候ひき。（略）帰り来て、苦悶愁悵の間に、先ず思い立ちたるは、嘗て先生の御書にて開き知りたるワグネルの研究に御座候。元より学浅く、資乏しき事に候へば、彼の巨人が胸中を闡き尽くすなどは思いも及ばぬ儀に候へど、二三の書を友に、日夕思ひに耽りて、又得る所無きに候はざりき。はかなき夢想児に過ぎざる私、敢てワグネルを研究したり等とは申すまじく候。ただ、力の限り小さき成心を没して、空想の翼たゆまざるままに。…ああ、かくて先生は、知らざるうちに未見の一徒弟のために、尊き光の導者と成られ申候。」⁽⁴⁾

明治34年6月から明治35年8月にかけて、樗牛と嘲風の論争が「太陽」誌上に掲載された。：

「姉崎嘲風に与ふる書」「太陽」第七卷第七号 明治34年6月

「高山樗牛に答ふるの書」「太陽」第八卷第二号・三号 明治35年2、3月

「高山君に贈る」「太陽」第八卷第三号・四号 明治35年3、4月

「再び樗牛に与ふる書」第八卷第十号 明治35年8月

「一昨年の夏」とは明治35年の夏、即ち、細越毅夫宛書簡を書く2ヶ月前のことである。この時読んだ嘲風とは、「再び樗牛に与ふる書」第八卷第十号 明治35年8月であると思われる。退学直前に、この本を読んでいたことに驚嘆を覚える。

さらに、啄木のワグネル熱を示すものとして、啄木の第1次在京時代について、盛岡中学の1年上級生だった野村長一が次のような文章を残している。：

「明治三十五年の春、私は中学を卒業して上京し、本郷台町の下宿に納まって、高等学校入学のための試験勉強を始めた。……私より

一年下の級で中学の五年になったばかりの啄木は、その年の五月、中学を飛出して、私共の後を追って上京して来たのである。……久世山の啄木の下宿は、玄関から左へ入ると、直ぐ明るい六畳で、南は一ぱいに久世山の斜面と共に陽に照され、あまり明る過ぎるのを嫌った啄木は、小さい机を北窓の下に据へ、その上には、「ローエン格林」⁽⁵⁾であつたと思ふ、ワグナーの劇詩の英訳が、読みさした頁を開いたまま置いてあつた。中学五年生で中途にした十八才の啄木が、そんなものを読めたか—と疑ふ人があるかも知れない。併し、それは啄木の神童振りを知らないものの疑ひで、数学その他の暗記物は、恐ろしく不得手であつたに拘らず、辞書と首つ引きであつたが、野心的で向学心に燃えた啄木は、かなりよく英文を読んだことも事実である。」⁽⁶⁾

野村長一の記憶が正しければ、啄木が読んでいた「ローエン格林」の英訳は、当時出版されていたものは多くはなく、“Wagner's Lohengrin” by Dry, Wakeling Philadelphia G.W. Jacobs (First Edition, May, 1902) だけである。

1-2 書簡に見る Heaven sent Genius と time alone can prove の出典

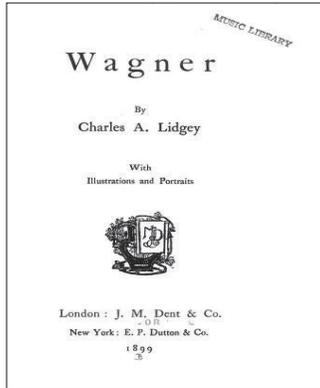
さらに、明治36年3月19日 小林茂雄宛書簡にも、ワグナーに関すると思われる英語の句が載っている。岩手日報に「ワグネルの思想」を連載する2ヶ月あまり前のことである。

「詩に於て自然の声と情の響きと私は何れをも取ります、尚ぶべきは Heaven sent Genius で決して、人まねの忌味ある偽情詩ではありません。要するに左甚五郎の作った者は鼠でも葡萄でもはた獅子でも何れも生きています。」⁽⁷⁾

Heaven sent Genius) とは、リッジーの「ワグナー」中の言葉に違いない。後述する「ワグネルの思想」の「小序」において啄木は「さればワグネルを研究する者は必ず先ずブリッヂー氏の云ふた如く、彼の生涯に於ては芸術家てふ名称が第二の地位である事を了得せねばならぬ。」⁽⁸⁾ と述べている。C. A. Lidgley's

“Wagner” (1899) の1冊すべてを Internet Archive からダウンロードしてこの句を検索してみた。

Charles A. Lidgley による“Wagner”の表紙



Charles A. Lidgley: Wagner with Illustrations and Portraits London: J. M. Dent & Co. New York: E. P. Dutton & Co. 1899

上記の本は、初版で、第2版 1902年、第3版は1907年に出版されている。

この Heaven sent Genius を検索してみると、CHAPTER I の1ページにこの句が載っている。(Heaven sent Genius は実際には the heaven-sent genius である。)

The early portion of the nineteenth century was notable in the annals of music. It witnessed the development of the *heaven-sent genius* of the mighty Beethoven ; it fostered the youthful promise of Weber, Spohr, Rossini, Auber, Berlioz, Chopin, Schumann, Mendelssohn, and Liszt ; and it saw, at Leipzig, May 22nd, 1813, the birth of Wilhelm Richard Wagner.

(19世紀の初頭は音楽史上において、注目すべきであった。偉大なるベートーベンという、神がこの世に送り出した天才の出現を見た。19世紀は、ウエーバー、スポー、ロッシニー、アウバー、ベルリオズ、ショパン、シューマン、メンデルスゾーン、

リストなどの若き有望な音楽家を育てた。そしてついに、1813年5月22日、ライプツヒにおいて、ウイリアム・リチャード・ワグナーの誕生を見ることになる。)

「ワグネルの思想」が連載し終わった、明治36年9月17日 野村長一宛の書簡にもリッジーからの引用らしき英語の文、*time alone can prove!* が出てくる。

「生の心も亦漸く恢復して、今では多大の煩悶をもち乍らも猶一樓光明にいたる路を失はずに居ると云ふ事丈だけを申しあげませう。生の眼には若い、高い希望の光がうつつて居る。そしてその光明の周囲には多くの先輩や友人やの軽蔑した顔付きなどが数限りなく浮遊して居る。妬み多き運命の女神が何れを助け玉ふかは、今、生の想像することを措きて、誰も知るものはあるまい。あゝ、*time alone can prove!*」⁽⁹⁾

この句も、C. A. Lidgley's “Wagner” 75ページのCHAPTER V に載っている：

whether the ideas to which music took a secondary place in his purview will be as fruitful, *time alone can prove*. In writing a biography of most of the world's greatest musicians, the development of their musical nature is, as a general rule, all that calls for criticism or even remark.

(彼の活動範囲において音楽は二次的なものであるという考え方が正しいかどうかは、時間のみが知りえることである。世界中の最も偉大なるたいていの音楽家の伝記を書く場合、音楽的天性の進展は、概して、批判や批評を呼び起こすのである。)

1-3 啄木が推薦するワグネルの研究書

明治36年7月27日、この時すでに、岩手日報に「ワグネルの思想」を連載し終わっているが、細越毅夫宛書簡には、

「美しの御端書只今拝見いたし候。つまらなくのみ起き臥し居候身には友恋しさの情も一汐に御座候。去る14日よりは来訪の友ひきもきらず。病骨も大に快報に

赴き、うれしく思ひ居候へど。永く筆取り難き弱身の悲しさ衷心の寂寥は慰めんすべも無之候。今は左に生のワグネル研究に資せし書目を挙げて。告げまほし感想は次便を期せん。

H. S. Chamberlain's "Richard Wagner"
7Y05 銭

Krehbiel's "Studies in the Wagnerian
Drama" 2Y35 銭

C. A. Lidgley's "Wagner" 2Y35 銭

Buman's "A Study of Wagner" 6Y90 銭
(Buman は Newman の誤り 筆者注)

以上の外にも Musical drama of R. Wagner
といふ英書ある由なれど生はみた事なし。⁽¹⁰⁾

「さる 14 日よりは来訪の友ひきもきらず。」とあるのは、「ワグネルの思想」は一般には評判はよくなかったのだが、友人の間では話題となっていたことがよくわかる。さらに、「永く筆取り難き弱身の悲しさ衷心の寂寥は慰めんすべも無之候。」と述べ、体の衰えが「ワグネルの思想」の中絶の原因であることが、伺える。この細越毅夫宛書簡は細越毅夫が「ワグネルの思想」を読み、その参考図書の間い合わせの返信であると思われる。

近藤典彦 (1990) は「石川啄木のワグナー研究と英書」(成城学園高校同人誌)において、上記 5 冊のワグネル関係の参考書のうち、実際に啄木が利用したのは、C. A. Lidgley's "Wagner" だけであることを立証している。

2. 啄木の日記に見るワグネル

2-1 甲辰詩程の中のワグネル

さらに、書簡体日記、甲辰詩程 (1904 年 [明治 37 年])、7 月 28 日には、「左に記す所は乃ちリッジー氏がワグネル劇解説中の『タンホイゼル』の一章を抄訳するものなり。」と日記を締めくくっている。この日記は「洋罫紙を綴った一頁二十六行紙数十八枚のもので、三十六

頁中三十五頁にわたって縦書きでかかれており、…」⁽¹¹⁾ となっているので、「左」とはこれから書く予定のものであると推測できるが、7 月 23、24、25、26、27 日には既にかかなりの長さで、ワグネルの作品について触れている。7 月 23 日付けに次のような記述が見られる：

「日は午に上りて暑さ加はり遠く夏蟬の声きこゆ。我は喜びを以てワグネルの事書かんとす。楽劇「タンホイゼル」中のマーチが絶代秀俊の作なるは西欧の評家も多く讚賞の道を一にする者の如し。我はその天品の遺韻をはしなくも洋濤万里の天に於て恋しき妻よりきくをうべき好運を荷へる者なり。僕やワグネル研究に多大の趣味を有するもの。而してそが人間再生 (ヒューマンジェネレーション) の説を体現して能く冲天の神才を発揮しえたる此偉人の諸作が他日わがたのしき家庭の鳳歎に伴ふて、われらが愛の尊き宣伝者たらんとするに至つては、夫としての我名誉、何ぞこれに如くものあらんや。妻よわれは限りなき満足を以て、今、「タンホイゼル」に就て君の参考となるべき事を書き送らん。」⁽¹²⁾とあり、7 月 23、24、25、26、27 日に書かれた文は、リッジーのワグネルの劇解説中の『タンホイゼル』の一章の抄訳であると思われる。「左に記す所」の左とは、書き上げた原稿を左側に積み重ねていたものを指すのではないであろうか。

さらに、抄訳中に出てくる、タンホイゼル、ローエングリン、ニーベルンゲン、パルシファル、リインヅ、漂流和蘭人 (フリーゲンホレンデル)、ミュヂツクドラマ (Music - drama)、テプリツツ、ドレスデンなどの固有名詞は Chapter II の見出しに殆ど出てくる。啄木が抄訳するにあたり、この Chapter II と Chapter X の "Tannhäuser" を主に用いたと思われる。

CHAPTER II

A stormy voyage — "The Flying Dutchman"
— His stay in London — Crosses to Boulogne
— Meyerbeer — Arrives in Paris — 111 success with the theatrical directors — His early

struggles — The concerts at the Conservatoire — His wife's devotion — His revolt against the debased condition of art- "Eine Faust Overture" — Sketches for "The Flying Dutchman" — Fillet's dishonourable conduct — Writes "Der fliegende Hollander" in seven weeks — Studies in history and legend — A holiday at Teplitz — Sketches for "Tannhäuser" — Returns to Dresden — Successful production of "Rienzi" — Production of "Der fliegende Hollander" — Luke-warm attitude of the public — Becomes joint Hofcapellmeister to the Court orchestra — Other conducting work — "Das Liebesmahl der Apostel" — Wagner as a conductor — Completes "Tannhäuser" — Assists at Weber's re-interment at Dresden — Sketches for "Lohengrin" and "Die Meistersinger" — First performance of "Tannhäuser" — Hostile press criticism — Completes "Lohengrin" — "Jesus von Nazareth" - "Die Wibelungen, Weltgeschichte aus der Sage" — "Der Nibelungen Mythus als Entwurf zu einem Drama" — "Siegfried's Tod" — His art theories — The Revolution of '49 — His part therein — Escapes to Weimar to avoid arrest — Liszt gets him away to Paris — Eventually reaches and becomes a citizen of Zurich.

2-2 啄木によるワグネルの抄訳

次に啄木が抄訳中で引用したと思われる英文の主なものを次に示す：

○楽劇「タンホイゼル」は実にかかる変転の間に、一千八百四十二年より同四十四年の終に至るうちに幾度かの改作修正を経て成りぬ。…加ふるに共演者中には熱心なる崇拜家チヒヤチエツク氏、シラデル・デヴリイント夫人等ありしが故に、此公演は非常なる成功を以て其局を終り…

"Tannhäuser" was commenced in 1842 and finished in 1844. It was first performed

in Dresden on the 19th of October, 1845. Tichatschek was the Tannhäuser, Madam Schroder-Devrient the Venus, Johanna Wagner (the composer's niece) the Elizabeth, and Mitterwurzer the Wolfram. (Chapter X Tannhäuser p.160)

○妻 (Minna Wagner) また彼を愛すと雖ども彼の天才を認むる事能はず。

Wagner, up to the time of her death, always spoke of her with affection. The union was unfortunate. Minna Wagner had not the power to understand her husband's genius : (Chapter II p.21)

○二月、テプリッツに着し、止まること六ヶ月。其間主として新劇『タンホイゼル』のために思索し努力し、果た苦心具さに肝胆を砕きぬ。《此曲中の有名なる「進行曲」は当時の作にかかる部分なり》七月ドレスデンに入り万難を排して十月二十日遂に『リインヂ』の第一回公奏を開くに至れり。

The time at Teplitz was passed in making sketches for the new opera which was to be the immediate result of his recent researches — Tannhäuser ; and in July, 1842, he arrived in Dresden.

(Chapter II p.27)

○『リインヂ』は一千八百三十八年より同四十年までに成りたる作にして…、

"Rienzi" was commenced in 1838 and completed in 1840. (Chapter VIII p.144)

上記の引用箇所からも分かるように、「左に記す所」とは書き終えた原稿をさす可能性が高い。また、啄木の抄訳と原文を照らし合わせると、啄木がかなりの英語力をつけていることが分かる。

2-3 啄木の詩作

甲辰詩程とは、「きのえ辰の年 (1904年) に詩作の道を歩む」という啄木の詩に対する意欲の表れである。詩集「あこがれ」に載っている詩の内、この年に書かれたものが25篇ある。甲辰詩程には、「EBB AND FLOW」の中の

詩の一篇、「THE SEA LIMITS」(by Gabriel Rossetti) と、作者名が書いていない次の詩を書き写している。

My mind to me a kingdom is,
Such present joys therein I find
That it excels all other bliss
That earth affords or grows by kind :
Though much I want which most would have.
Yet still my mind forbids to crave.

作者は記していないが、English Prose and Poetry (1137-1892) Selected and Annotated By John Matthews Manly, Ginn and Company (1907) の中の 160 頁に載っている、Edward Gyre の “My mind to me a kingdom is” というタイトルの詩である。これは 792 頁の分厚い本で、啄木が購入した可能性は薄い。恐らく、Ralph M. Sargent, The Life and Lyrics of Sir Edward Dyer, Oxford Clarendon Press 1968 を参考にしたものであろう。この詩は現在でも CD や Video にされて売られている。また、インターネット上でこの詩の朗読を聞くことが出来る、非常に有名な詩である。Edward Gyre はシェイクスピアの別人の一人である。啄木が何故この詩を取り上げたのかは定かではないが、こころの満足をうたったこの詩は、節子への恋慕と関係があると思われる。

3. 啄木の「ワグネルの思想」

3-1 ワグネルの啄木に与えた影響

啄木のワグネル研究は、盛岡中学校を退学する直前に、嘲風に影響を受け、敗残者となって故山洪民で必死に再起を諮る時期を経由して、洪民を追われ北海道に渡るまで、ほぼ 5 年間続いている。この 5 年間とは、まさに啄木の自我形成の期間である。この自我の形成はワグナーに影響を受けていると言っても過言ではない。洪民日記 (明治 39 年) 三月廿日において、啄木は次のように述べている。：

「たゞここに、意志の世界と愛との関係は猶依然として哲学上不可解の疑団として残つて居る。この問題の解決は、実に我が人生観最

後の解決であらねばならぬ。

ここに一解あり、意志といふ言葉の語義を拡張して、愛を、自他融合の意志と解くことである。乃ちシヨウペンハウエルに従って宇宙の根本を意志とし、この意志に自己発展と自他融合の二面ありと解する事である。

この一解あって、自分の二十年間の精神的な生活が初めて意義あるものとなった。この一解が乃ち自分の今迄に於ける最大の事業である。

この一解あって、一切の説明は無用である。人生一切の矛盾は皆氷解した。

かくてワグネルの示した人生の理想は、完全なる基礎に立つて、初めて真に我が最高最後の目的となったのである。(太字は筆者)⁽¹³⁾

このように、ワグネルは、まさに啄木の人生の理想であると位置づけている。

3-2 岩手日報に掲載した「ワグネルの思想」とその目的

「ワグネルの思想」と題する論文を「岩手日報」に、7 回に渡って掲載している (明治 36 年 5 月 31 日、6 月 2、5、6、7、9、10 日)。そして、その論文構成を「(一) 小序」において次のように示している：

- 一、序論 十九世紀とワグネル—文明の理想—人神との争—個人主義—愛の融合の世界—ワグネルの暗示。(包括的批評)
- 二、ワグネルの性格。性格と其諸事業—思想の基点。
- 三、ワグネルの政治思想。国家の理想—国家心意の基礎と至上権—ワグネルと独逸—人種解放と人類の改造—近世国家の理想上破滅—ワグネルと社会主義。
- 四、ワグネルの宗教。宗教とは何ぞ—ワグネルと基督及び基督教—古代希臘の研究—宗教と芸術—ワグネルの宗教的感觸と二大信条
- 五、芸術と人民。民衆の生得権。
- 六、『芸術と革命』。『未来の芸術』。『歌曲と戯曲』。ワグネル著作の傾向。
- 七、愛の教理。人類の改造。

八、結論。ワグネルの影響－日本思想界に対する吾人の要求。

附、ワグネル略伝。

ここで注目すべきは、「序論の二続」の末尾で、次のように述べていることである。

「〔白蘋記す。ニーチェ、トルストイ、ワグネル三氏思想の比較は次号に於て其項を結ぶべし。此条は論者の最も興味を感じずる所なれど、本論の要はワグネルの思想を紹介するに於て、さらでだに一月にも亘るべき此篇、今我世界観人生観を詳細し能はざるを恨事とす。杜鵑啼く夜の窓にて。二日誌す。〕」

要するに、この論文の目的は、ワグネルの思想を紹介することなのである。近藤典彦(1991)が述べているように、「実際に論じられた部分は仏教思想、また姉崎嘲風・高山樗牛・網島梁川らの浪漫主義的な思想、日本に輸入されたばかりのワーグナー論、トルストイの『我懺悔』、On Life、ニーチェのツアラツストラの一部等を撰取しての立論」⁽¹⁴⁾である。

即ち、論文構成の二から七までは、ワグネルの思想の紹介であると考えていいであろう。

3-3 「ワグネルの思想」とリッジーの“Wagner”

書簡にでてきた、“the heaven-sent genius” “time alone can prove” の句が C. A. Lidgley’s “Wagner” からの引用であること、また啄木の「ワグネルの思想」の1(一)小序で「さればワグネルを研究する者は必ず先ずブリッヂー氏の云ふた如く、彼の生涯に於ては芸術家てふ名称が第二の地位である事を了得せねばならぬ。」という記述があること、さらに、書簡体日記、甲辰詩程(1904年[明治37年])、7月28日には、「左に記す所は乃ちリッジー氏がワグネル劇解説中の『タンホイゼル』の一章を抄訳するものなり。」の記述から、「ワグネルの思想」の紹介の種本は C. A. Lidgley’s “Wagner” であると思われる。これを確証するために、先に、ダウンロードしたリッジーの Wagner をあつたててみることにする。

(1) 本の構成

Content は Chapter I ~ Chapter XV から

成り、Chapter I ~ Chapter VII までは複数の見出しからなり、Chapter VIII ~ Chapter XV までは単一の見出しからなる。さらに、Appendix、Index と続き、268 頁からなる。38 頁と 39 頁の間に、啄木が書齋に掲げたと思われるワグナーの写真が載っている。

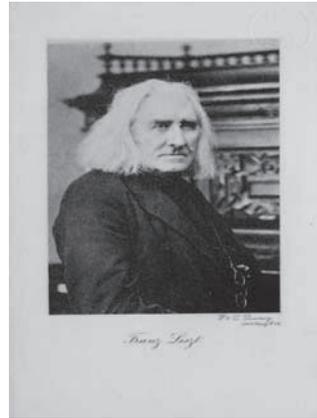


図1 ワグネルの写真

例えば、Chapter V の見出し部分を書き出してみると次のようになる：

CHAPTER V

His faith in human nature — Personal characteristics — Wagner and Schopenhauer — His mental activity — Early connection with the stage — His impulsiveness — His failure as a politician and its cause — His idea of revolution — A supreme king ruling directly over a free people — The Family <versus the State — A king should be the “first and truest of all Republicans” — Wagner and Socialism — His deep religious feeling — Art the birthright of the Folk — “Die Kunst und die Revolution” — The Drama the highest form of Art — Its origin amongst the Greeks — Decay of the Drama — Philosophy and Christianity — His impatience of dogma — His own creed — “The holy-noble god of ‘five per cent’” — The debasement of Art thereby — Revo-lution of social conditions

imperative — “ Das Kunstwerk der Zukunft
 ” — Feuerbach-Schopenhauer . . , 75

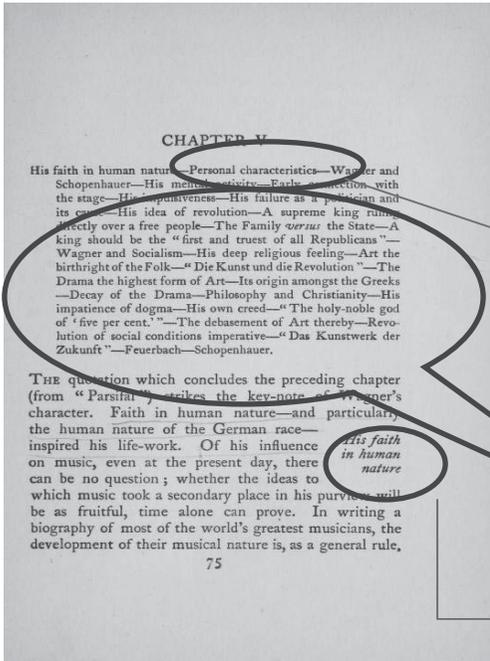


図2 Wagner の Chapter V

本文中での小見出しの表記

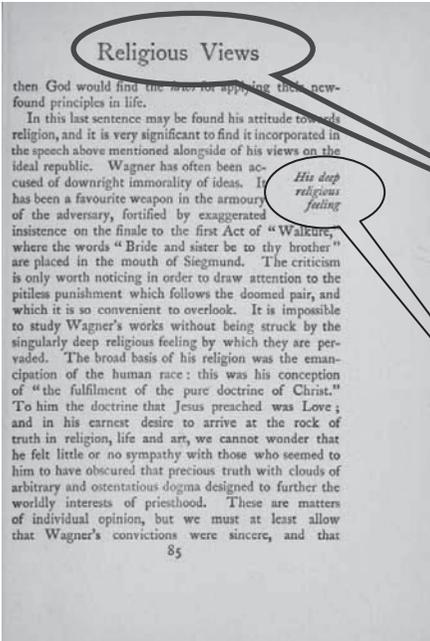


図3 Wagner の大見出しと小見出し

表1 「Wagner の見出し」と「啄木の見出し」

Wagner の大見出し	頁		啄木の見出し	Wagner の小見出し
Chapter V	75			
	76	二	ワグネルの性格 (2-1)	Personal characteristics (2-1)
	76		性格と諸事業-思考の基点 (2-2)	(p.76~77 の 要 約) (2-2) His entire intellectual Life was based on two main principles—Faith and Love
Political Ideals (3-1)	83	三	ワグネルの政治思想。	
			国家の理想 (3-1)	
	82		国家心意の基礎 (3-2)	A supreme king ruling directly over a free people (3-2)
	75		ワグネルと独逸 (3-3)	なし (p.75~76 の要約) (3-3)
	85		人種解放と人間の改造 (3-4)	the emancipation of the human race (3-4)
	84			a regeneration of mankind (3-4)
	83		近代国家の理想上破滅 (3-5)	a complete subversion of this ideal (3-5)
	84		ワグネルと社会主義 (3-6)	Wagner and Socialism (3-6)
Religious Views (4-1)	85	四	ワグネルの宗教 (4-1)	
			宗教とは何ぞ (4-2)	なし (本文 p.84 と 85 の要約) (4-2)
	89		ワグネルと基督及び基督教 (4-3)	Philosophy and Christianity (4-3)
	89		古代希臘の研究 (4-4)	なし (本文 p.88~89 の要約) (4-4)
	90		宗教と芸術 (4-5)	His impatience of dogma (4-5)
	85		ワグネルの宗教的感覚 (4-6)	His deep religious feeling (4-6)
	91		と二大信条 (4-6)	His own creed (4-6)
Art and the Folk (5-1)	87	五	芸術と人民 (5-1)	
	87		民衆の生得権 (5-2)	Art the birthright of the Folk (5-2)
	88	六	芸術と革命 (6-1)	Die Kunst und die Revolution (6-1)
	93		未来の芸術 (6-2)	Das Kunst und die Revolution (6-2)
	118		宗教と戯曲 (6-3)	Opera and Drama (6-3)
CHAPTER VI	95		引用なし	
CHAPTER VII	118			
	141	七	愛の教理 (7-1)	His love of human nature (7-1)
	143		人類の改造 (7-2)	Man's regeneration (7-2)

3-4 「Wagnerの見出し」と「啄木の見出し」
次に啄木の「ワグネルの思想」の見出しと
リッジーの“Wagner”の見出しとを対照して
みると表1のようになる。

表1から分かるように、「Wagnerの見出し」
と「啄木の見出し」が一致しており、啄木が
岩手日報に連載した「ワグネルの思想」は、リッ
ジーの“Wagner”を元に行っていることは確か
である。

3-4 「ワグネルの思想」の中断の理由

啄木は(一)～(七)の項目を説明するこ
とでワグネルの思想を紹介しようとしたが、
実際には序論だけで筆を絶ってしまった。こ
れに関連しては、函館・札幌・小樽・釧路と
転々と渡り歩き、そして再び上京した1908(明
治41)年、9月16日の日記で、5年前に未完
のまま終わったこの評論について、次のよう
にその理由を書いている。

「三十六年の二月病を負うて浜民に帰り、少
し研究したり思索したりした結果、五月頃(?)
に“ワグネルの思想を論ず”といふ言文一致
の論文を毎日一回分づつ書いて送って、出し
た。十回許り続いたが、それでも序論が終ら
ずに病のために筆を絶った。これまでは、予
がまだ白癩と号してみた時代。」

さらに、岩手日報に「ワグネルの思想」を
出した後の、明治36年7月27日、細越毅夫
宛書簡には、「…病骨も大に快報に赴き、うれ
しく思ひ居候へど。永く筆取り難き弱身の悲
しさ衷心の寂寥は慰めんすべも無之候。…」と、
体調が優れなかったことを述べている。

確かに、病気のために筆を絶ったと思われ
るが、翻訳に時間がかかることと、岩手日報
が長期に渡って掲載することが不可能であっ
たこと、さらには、詩作への思いが心を占め
ていたのではないだろうか。明治37年1月
13日付けの姉崎嘲風あての書簡に、「昨秋11
月の初め、病愈るにつれて我が終生の望みな
る詩作の事を思い立ち、ふとした動機より一
つの新調を発見し、以後営々として人知れぬ
楽しみの仲に筆を進め居候。」と「EBB AND

FLOW」を中心とした詩作に余念がないこと
が伺える。

注

- (1) 『石川啄木全集 第5巻 日記I』明治35年 p.5
- (2) 『石川啄木全集 第7巻 書簡』明治37年1月13日 姉崎正治宛 p.34
- (3) 『石川啄木全集 第7巻 書簡』明治35年10月1日 細越毅夫宛 p.15
- (4) 『石川啄木全集 第7巻 書簡』明治37年1月13日 姉崎正治宛 p.34
- (5) ローエングリン (Lohengrin) ドイツの伝説の主人公。「白鳥の騎士」とも呼ばれる。ウオルフラム・フォン・エシェンバハの叙事詩の終りに現れる。ワグナー作の3幕の楽劇 Lohengrin はこの叙事詩を素材にして書かれた。(ブリタニカ国際百科事典)
- (6) 『日本の作家7 石川啄木』小学館 p.109
- (7) 『石川啄木全集 第7巻 書簡』明治36年3月19日 小林茂雄宛書簡 p.25
- (8) 『石川啄木全集 筑摩書房 第5巻』p.15「ブリッジー」は原本から判断して、「リッジー (Lidgey)」の間違い。
- (9) 『石川啄木全集 第7巻 書簡』明治36年9月17日 野村長一宛 p.29
- (10) 『石川啄木全集 第7巻 書簡』明治36年7月27日 細越毅夫宛 p.27
- (11) 『石川啄木全集 第5巻 日記I』甲辰詩程 解題 p.415
- (12) 『石川啄木全集 第5巻 日記I』甲辰詩程 明治37年 7月23日 p.57
- (13) 『石川啄木全集 第5巻 日記I』浜民日記 明治39年 3月20日 p.81
- (14) 『日本の作家7 石川啄木』小学館 p.296

*近藤典彦(1990)『石川啄木のワグナー研究と英書』成城学園高校同人誌、おいて、「ワグネルの思想」の種本は、Lidgey, C. A. Wagner であることを詳しく検証している。

本論によって、近藤氏の検証がまったく正しいことが確認できた。